

水辺だより

新潟の水辺を考える会 '93.11月

今月も遅れてしまいました。バタバタと月日がたっしまい、気がつけばもう11月じゃありませんか。「今年の夏はなかったね。」なんて話をしていたと思ったら、既に冬の気配がただよう今日この頃です。風邪も流行っているようです。

皆様、お元気ですか？

先月は、新潟大学の多賀先生をお招きして、ラオスの話を中心としたアジアのお話をお聞きしました。私の話は感想文的な、主観を中心とした感情移入話だったのですが、多賀先生のお話は客観的な事実を交えての、論理的なおもしろいお話でした。バンコクを中心とした東南アジアのネットワークが形成されつつある現在、アジアの変化は目まぐるしいものがあります。

それにしても、如何に私たちがアジアのことを知らないかということが、先生のお話を聞いていてもはっきりと感じてしまいます。戦後、アメリカを中心とした西欧社会に目を向けてきた日本で育った私は、つい最近まで、こんなにアジアのことを知らないということにさえ、疑問をもっていませんでした。私たちの物質的に豊かな生活は、アジアの国々によってこれほどまで支えられているというのに。

そして、この構造を、私たちがあたりまえのように受入れ、暮らしている事実は、私たちの精神が貧しくなっていることの現れではないでしょうか。もしくは、感じているからこそ、きちんと見ようとししないのか。どちらにしても、ゆがんだ構造であることには違いなく、その歪みは否応なく近い将来私たちの身に帰ってくるとは、疑いようが無い気がします。

その日の夕方、多賀先生を交え、お酒を飲んでいた時に多賀先生のお話の中でミヒャエル・エンデがこんなことを言っていたというのが頭に残り、本屋さんでその本を見つけました。「オリーブの森で語りあう」というエンデを交えた対談集で、同時代ライブラリーから出ています。ちょっと、私にはむずかしい所がありますが、今の時代の本だと思えます。対談は10年くらい前なのに、まるで言っていることが古くない。もし、本屋さんで見つけたら手にとってみて下さい。オススメです。

鮭、みずべの野生

日時：11月27日(土) 午後1時半～4時頃

会場：坂井輪公民館 4075室

内容：カジカ養殖に取り組む関川村の松田繁雄さん、
シベリアでマス釣りに挑んだ会員の井上信夫さん
の話を中心に、川の生き物から見た環境を考える。

参加費：300円(お茶代)

お話をしてくださるご両人とも、川魚への想いは人一倍、溢れるほどの愛をもって語ってくださることでしょう。

次に松田さんが以前に書かれた鮎の話を紹介させていただきます。

鮎 の 話



魚偏に秋と書いて鮎(かじか)と読む。荒川水系に棲息するこのカジカは、本州・四国・九州(宮崎・熊本・鹿児島を除く)に分布し、一生河川で生活する。この他、カジカの仲間は、河川だけでなく海や湖にも棲息しているが、淡水のカジカ類は、日本に8種類存在し、又北米大陸・ロシアのバイカル湖・ヨーロッパなどにも住んでいる。今回は、日本固有の種である「鮎」(学名 *Cottus pollex*) について話をしたい。カジカの英名は、Sculpin(スカルピン)と言い、「役にたたない獣」を意味し、アメリカでは、鮭の卵を食べるやっかい者らしい。しかし、我が日本においてのカジカは、古くは『源氏物語』にも登場しており、決して「スカルピン」ではないことを、カジカの名誉のためそのいくつかを紹介したい。

その昔、食用の家畜飼育が行われていなかった時代には、狩猟によるシカやイノシシが最上の獣肉とされていて、河の魚として最上の意味から「河鹿」と名付けられた。地方によっては、不老長寿の食べ物として、又胆石の薬として用いられてきたところ

もある。近年カジカは、環境破壊や河川の護岸改修によってその数が激減し、高級魚の1つに数えられるようになった。北陸金沢の郷土料理としてのゴリ料理や、京懐石の食材としてのカジカは有名であるが、このような特別な料亭料理でなくとも、昔は煮干代りに味噌汁やそばの出汁に使ったりして、山間地の一般的食べ物であった。空揚げや素焼きのカジカに醤油をつけて食べるのは最も一般的であるが、変わったものでは、東北地方のカジカ鍋や山陰地方のカジカの入り麺などがある。あのグロテスクな風体からは、想像できないほど美味で、雑誌『つり人』の創刊者の一人佐藤垢石は、『たぬき汁』と言う本の中で、「晩秋の美味のうち、鯀のなますに勝るものは少ないと思う」と絶賛している。

カジカと日本人の関わりは古く、『宇津保物語』や『源氏物語』で「石伏魚」の名で登場するが、「石伏」の名は、カジカが石の下を住処としているためと思われる。又、カジカは多くの歌人や俳人の歌や俳句に詠まれている。カジカが山間の溪流で、ピーピーコロコロと美しい声で鳴くと信じている人がいるが、鳴くのはカジカ蛙の方で、棲息場所が同じ為の混同である。鯀は、読んで字のごとく秋の季語である。

山川の小石流るころころとかじか鳴くなる谷の落合	建礼門院
鯀突き紅葉了へたる瀬の雨々	黒木野雨
かも河のかじかしらずや都人	撫村

関川村を流れる河川流域に生活していた石器時代や縄文時代の人達が、串刺しにした鯀を焼きながら、そこでどんな会話がなされていたのか、1匹のカジカをながめながら、遙か2千年以上も昔に思いをよせるのは、私だけだろうか。

科学技術の発達にともない、私たちの生活が良くなるのと反対に、河川を含む自然環境は年々悪化している。そこで、河川環境とそこに住む鯀の生態について少しふれてみたい。

川にいるカジカは、海産カジカ類を起源とし、河川に侵入する過程で陸封されたというのが一般的見解である。

12月が過ぎて、水温が10℃をわって、日毎に下がり始めると雄は、背びれの先端が金色になり、雌は腹が膨れ始める。そして春先の雪解け水の水温が上がり始め、6～7℃になると産卵が始まり、その期間は4月の初めから6月頃まで続く。

まず雄が産卵場である石の下に陣取り、順次雌を誘い込んで石の下に卵を産みつける。卵を産んだ雌は追い出され、新しい雌を引き入れ、1匹の雄が十数匹の雌に卵を

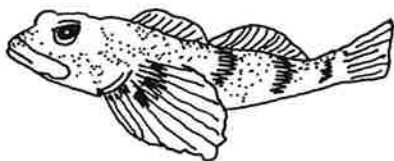
産ませる。又、1匹の雌が産む卵の数は、100~500粒位で、大きさは3mm程度である。一度産んだ雌は、20日前後に再び産卵に加わり、まれに3回も産む雌もある。そして、卵を産みつけられた石の下に雄が陣取り、約一ヶ月間、赤ちゃん誕生まで雄は卵を守る。時には近づく外敵を追い払ったり、大きな胸びれを使って卵に水を送り、卵に水かびが付くのを防いでいる。このため、雄は雌より成長が早く、大型になる。川にいるばばカジカと呼ばれる15cm位の大きな鰈はほとんど雄である。又、ふ化した鰈の赤ちゃんは一週間後位から小型の水性昆虫を自分で食べ始める。そして2年後には、親として産卵に加わるのである。

一方、河川環境を考えると、カジカのような底棲生活をする魚にとって、川底の石の状態は非常に気になるところである。川底の石が砂や泥で「目づまり」する、といった状況にならないで欲しいものである。もしそうなると、カジカの居場所がなくなり、産卵場まで無くなってしまふ恐れがある。又、河原の雑木もその存在意味は大きい。水性昆虫達を主食とする魚たちの餌の供給源だからである。治水・景観の許す限り、残して欲しいものである。

以前ある雑誌に、私のカジカ養殖場が取り上げられた時、全国各地から手紙を頂いたが、すでにカジカという魚は絶滅してしまい、若い人たちはその存在すら知らないと言った内容のものが何通かあった。

環境破壊や汚染に対して最も敏感なカジカは、自然環境を守る一つの目安になりうると思う。清流を誇る我が荒川が、我々の子々孫々までカジカの住める川であって欲しい。間違っても、ただ高いところから低いところへ流れる水の道とならないことを祈って、「カジカの話」の終わりとしたい。

出典：「わたしたちの荒川」関川村教育委員会





ある日のひらめき……こんなのあるといいのに。『台所の簡易排水浄化装置』

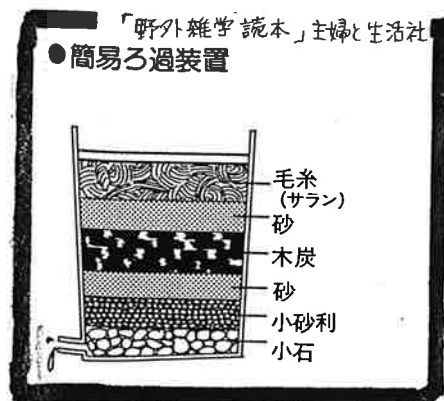
わたしのアパートの水はまずい。蛇口からの水を飲むことは、まずない。
今、手のひらサイズの浄水器がちまたでは売れているらしいが、湯沸し器さえつ
けられない今のわたくしには高嶺の花である。負惜しみかもしれないが、じぶん
ちだけきれいで安全な水飲んでいて、水環境全体の汚染には盲目になってる世の
中はちょっと変じゃない？

そこで、今日提案したいのは手のひらサイズの簡易排水浄化装置、その名も
「ごっくん」（仮名）。あくまでも排水に対しての浄化装置なのです。三角ゴ
ミケースに穴あきポリ袋でゴミを流さないようにしているご家庭も多いと思いま
すが、さらにワンランク上の夢の排水を贈ります。排水の受け口となっていると
ころに仕掛けるだけでお手入れ不要、カートリッジは1ヶ月ごとにお取替に伺い
ます（ダスキンさんみたい）。

ろ過の仕組みは企業秘密なので明せないのですけど、現代の科学の粋を結集
した装置なんです。本日は水辺の会会員の皆様に日頃の感謝の意味で、特別頒
布価格でな—んと、〇〇〇〇〇〇円、いかがでしょう？。

こういうのあったとしても、浄水器すら買えない私はたぶん買わないだろうけ
と……。

（川口）



原理はこれと同じはず、
でも高速、高純度処理
は難しいよな～。

というわけで、今月から新しいコーナーをつくりました。いつも、事務局ばかり文章を書くというのは、ワンパターンに陥ってしまう危険性が非常に高いため、会員の方々にも一筆書いて戴いて、お便りづくりに参加していただくという企画です。

内容は「水」に関することなら、何でもOKで、枚数、字数も自由です。ワープロ原稿を戴ければ、とても嬉しいですが、ワープロに親しんでいない方も当然いらっしやると思いますので、手書きでも構いません。

決りごとはただ1つ、前の人に指名されたら、逃れることはできません。指名された人は、締切日（こちらから連絡します）まで原稿を書き、次の人を指名します。指名できる人は、水辺の会の会員に限ります。会ったことが無い人でも、名簿を見て選びましょう。

とりあえず、まずは事務局からはじめます。皆様、よろしく願いいたします。

第1話「夜の二箇堤」

八木 栄子

ある秋の夜、私は渋谷さん（私のルームメイトです）と巻町へコンサートを聞きに行き、コンサート終了後「こまどり」で五目ラーメンを食べ、満腹になった体で二箇堤まで足を伸ばしました。今年の春、水辺の会のウォッチングで行ったあそこです。

あそこは私たちのお気に入りの場所になっていて、その日も星が美しい夜で、「ちょっと、寄っていこうか。」ということになりました。

ところが、現場に着いたら、外灯が全然無くために、足元がまるで見えず、とても棧橋までは、たどり着けない状況でした。「う～ん、どうしたものか」と諦めかけようとしていたら、なんとあずまやに灯りが見え、人がいる気配がします。「こんな時間に、何してるんだ？」と、自分達のことは棚にあげてのぞいてみると、若い青年が3人、火を焚き釣りをしていました。しかし、彼等の方は、突然の訪問者に、私たちの数倍びっくりしたようで、「こんな時間（大体夜の10時頃）に、女が、こんな所へくるなんて、何しにきたんだ、あんたら。」と、まあこんな風に言うわけですね。私たちは、ただ夜の美しい二箇堤をみにきただけなんです、なかなか理解されない

水辺の会例会のご案内

鮭、みずへの野生

日時：11月27日(土) 午後1時半～4時頃

会場：坂井輪公民館 4075室

内容：カジカ養殖に取り組む関川村の松田繁雄さん、
シベリアでマス釣りに挑んだ会員の井上信夫さん
の話を中心に、川の生き物から見た環境を考える。

参加費：300円(お茶代)

お話をしてくださるご両人とも、川魚への想いは人一倍、溢れるほどの愛をもって語ってくださることでしょう。

次に松田さんが以前に書かれた鮎の話引用させていただきます。

鮎の話

魚偏に秋と書いて鮎(かじか)と読む。荒川水系に棲息するこのカジカは、本州・四国・九州(宮崎・熊本・鹿児島を除く)に分布し、一生河川で生活する。この他、カジカの仲間は、河川だけでなく海や湖にも棲息しているが、淡水のカジカ類は、日本に8種類存在し、又北米大陸・ロシアのバイカル湖・ヨーロッパなどにも住んでいる。今回は、日本固有の種である「鮎」(学名 *Cottus pollex*) について話をしたい。カジカの英名は、Sculpin(スカルピン)と言い、「役にたたない獣」を意味し、アメリカでは、鮭の卵を食べるやっかい者らしい。しかし、我が日本においてのカジカは、古くは『源氏物語』にも登場しており、決して「スカルピン」ではないことを、カジカの名誉のためそのいくつかを紹介したい。

その昔、食用の家畜飼育が行われていなかった時代には、狩猟によるシカやイノシシが最上の獣肉とされていて、河の魚として最上の意味から「河鹿」と名付けられた。地方によっては、不老長寿の食べ物として、又胆石の薬として用いられてきたところ

☆その1 大熊先生が毎日小学生新聞で連載をしています。子供向けに川のことを書かれています。わたしにもちょうどよい文面で、おもしろいです。

☆その2 NVC (新潟国際ボランティアセンター) のラオス視察の報告会が11月20日(土)の午後、古町のNTTのホールで行われます。詳細はまだ決っていないようですが、興味のある方は八木までご一報下さい。また、11月16日から(多分21日まで)毎年ツアーに行かれている写真家の山井和緒さんの写真展も古町のNTTで開催されています。

編集後記

- 今回は、字が多すぎてしまいました。どうしてまでしようか？
- はやく、出たばかりと思いつ、仕事に追われ、11月までか。こぼれに字がたてられなりました。
- 先日、下田村の吉平山荘へ行きました。管理人の柳さん。知っている方もあります。山荘から歩いて30分くらい「雨の池」へ行。大雨状態の中、ワナの葉が、風は舞い。水紋流り。まわりに流れゆく様子を、20分くらい見ました。風の音、雨の音が、ときりやりに感じられた時間というは、ながたか。ススキが幸せなまじり。(お尻は冷たくなりまいたか) 11月3日で山小屋は閉まるということになり。来年、ワナの新緑は、むしりにいかれるのもよいと思っております。
- 今日からの新企画「水@all-エッセイ」に、ぜひご協力下さい。事務局の独断と思いつきでしかないので、おもしろいと思っております。